



愛知淑徳大学全学日本語教育部門 広報誌

あっと @JL

全学日本語教育通信



あっと @JLとは？

全学日本語教育部門は、学生の日本語運用力(Japanese Literacy)向上をサポートする組織です。ここから、学内における日本語運用力向上にむけたさまざまな取り組みを広く発信したいという気持ちを、“@”に込めました。

創刊号
2011年
3月31日発行

巻頭言

社会を生きる力としての日本語力

全学日本語教育部門長・文学部教授 小倉 斉

文学部では10年ほど前から、学生の日本語運用能力を向上させるためにさまざまな試みをおこなってきました。なぜなら、学生が言葉によって現実を認識する力、他者とのコミュニケーションを成立させる力、認識・思考の結果を情報として発信したり提言したりする力が弱まっているということを実感するような出来事が増えてきたからです。具体的対応策として、社会に出たときに必要となる実用的な日本語力の養成ということに主眼を置き、2004年度から文学部共通科目「実践日本語表現法」を開講することといたしました。

「実践日本語表現法」は「読む・書く・話す・聞く」という基礎的な力を高め、論理的な思考力を身につけることを目標としていました。やがて、実用的日本語力養成の必要性は文学部のみならず大学全体にとって急務の課題であるという議論が生まれ、2009年度には全学展開を見据えて試行的に文学部共通科目「日本語表現」を開講しました。その後、全学での使用を前提としたオリジナルテキストを作成すると



もに、さまざまな試行を積み重ね、ついに2010年度から、1年生対象の全学必修科目として新たなスタートを切ることになったのです。

「最近の学生は漢字が読めない、文章が書けない、まともに話せない」などと、学生の日本語基礎力の欠如を嘆いているだけでは問題は解決しません。大学生として必要不可欠な日本語力を身につけさせるために、「日本語表現」は体系的・段階的なカリキュラム構成となっています。日本語スキルを体系的に学ぶことによって、より正確な言葉で「考え」、「理解」、「表現する(伝える)」ことができるようになります。これは、円滑なコミュニケーションを成立させる力につながり、さらには考えるための力、社会に参加する力、よりよい人間関係を構築する力を身につけることにもつながります。実践的な「日本語表現」力は社会を生きる力の基盤になることを、スタッフ一同確信しています。

大学における学びの体験がその人の生き方と密接にかかわり、その後の人生に有意義なものとして反映されることは、言うまでもありません。また社会に出れば、これまで以上に、次々と新しいことを学び身につけていく必要性が高まります。「日本語表現」は10年先、20年先も学び続ける姿勢のベースになるものです。学生諸姉・諸兄が、「日本語表現」を学んだことで日本語力が高まった、あるいは考える力が身についた、というような成果を実感し、その後の人生につながる学修体験としてくれることを、切に願っています。



日本語表現テキスト (本学オリジナル)

愛知淑徳大学全学共通履修科目

「日本語表現」教育課程の概要

2010年度、本学では大学での学修基盤となる日本語運用スキルを身につけるため、全学共通履修科目「日本語表現」を新設しました。その教育課程の概要や特色について紹介します。



「日本語表現」科目とは？

論理的思考力や対人コミュニケーションのもとになる第一言語（日本語）のスキルをのばすための科目です。本学ではこれまで、同様の科目を各学部が個別に開講していましたが、2010年度から「日本語表現」を全学共通履修科目として一本化し、さらなる教育効果の向上を図ります。



「日本語表現」科目の全体像

日本語の「読む・書く・話す・聞く」技術を体系的に学ぶための3段階9科目を用意しています。レベル1〈基礎〉は全学部必修とし、レベル2〈応用〉およびレベル3〈発展〉は、原則としてそれぞれ1レベル下の科目の単位修得を条件に履修することができます。

レベル1 〈基礎〉

1年前期*

【必修】全学部

日本語表現 T1

大学での学修に不可欠な文章力(① 事実を正確に分かりやすく説明する力、② 論理的に自分の意見を述べる力)を養成します。

レベル2 〈応用〉

1年後期*

【必修】文学部・メディアプロデュース学部 / 【選択】左記以外の学部

日本語表現 T2

「日本語表現T1」の学修をふまえ、レポートの書き方、プレゼンテーションの方法の基礎を学びます。

レベル3 〈発展〉

2-4年

【選択】全学部

日本語表現 A1 〈ライティング〉
日本語表現 A2 〈スピーキング〉
日本語表現 A3 〈リーディング〉

論述型レポートの書き方、ディスカッション、論文の読み方など、学術的な表現スキルを学びます。

日本語表現 B1 〈ライティング〉
日本語表現 B2 〈スピーキング〉

敬語の使い方や報告の仕方、ビジネス文書・手紙文の書き方など、社会生活に必要な実用的な表現スキルを学びます。

日本語表現 C1 〈ライティング〉
日本語表現 C2 〈スピーキング〉

エッセイの書き方、朗読・読み聞かせなど、豊かで創造的な表現スキルを学びます。

*一部学部は、開講期が異なります



愛知淑徳モデルの特色

「日本語表現」科目では、授業内容・方法にさまざまな工夫を凝らしています。ここでは、その一部を紹介します。

特色 1

本科目完全対応オリジナルテキスト使用 (日本語表現T1・T2)

半期15回の授業に対応したオリジナルテキストを作成。「日本語表現T1・T2」はこのテキスト使用し、同一内容・同一進度・同一評価で授業を行います。

特色 2

少人数編成クラスで実践演習を中心に

実践演習を中心とした密度の高い授業を実現するため、原則として科目ごとに30~50人の定員を設けています。特に、「日本語表現T1・T2」では、少人数編成を生かしたグループワークを随所に取り入れ、学修効果をより高めるプログラムになっています。

特色 3

文献調査の方法から基本ルールまで レポートの書き方を徹底指導 (日本語表現T2)

大学に入って学生が頭を悩ませるレポートの書き方。文献の探し方は?表紙には何をかくの?引用のルールは? 「日本語表現T2」では、このようなレポート作成の基本について、一から指導します。

特色 4

発展科目の充実で学士教育課程全体をサポート (日本語表現A~C)

近年、初年次教育の一環として同様の科目を開講する大学が増えています。しかし本学では、より高度で実践的な発展科目を充実させ、初年次だけでなく学士教育全体を念頭におき、学生の学修をサポートするカリキュラムを整えました。



全9種類の「日本語表現」科目から、毎号1科目ずつ取り上げ、授業の様子を詳しくお伝えします。
第1回は、「日本語表現T1」(1年)です。

1年
全学必修

第1回 日本語表現T1

「日本語表現T1」では、大学での学修に不可欠な文章力を身につけることに重点を置き、その実践として、小論文(計3回)を作成しています。2010年度は、「高校生に愛知淑徳大学を説明する」、「電子辞書と紙の辞書とはどちらが優れているか」、「安売り競争はするべきか否か」というテーマで、それぞれ600~1,000字の小論文を書きました。

この授業では、小論文を書く前にテーマに関する理解を深めるため、グループで意見交換をします。議論を通して思いがけないアイデアを得ることができ、さまざまな視点から物事を考える力がつきます。また、書き上げた小論文は、提出前に学生同士で添削をします。この作業を通して、他の人が読んで分かる文章には何が必要かを意識できるようになります。

受講後のアンケートでは、初回的小論文を改めて読み直し、自分の成長がよく分かったという声が多く寄せられました。

ズームアップ!

ここがポイント

日本語表現 T1
小論文作成の流れ

STEP 1 はじめに、本学オリジナルテキストを使って、書き方のポイントを教員が説明します。



STEP 2 ブレーンストーミングの手法を応用し、執筆のための材料(アイデア)を集めます。



STEP 5 学生同士で小論文を添削し、改善すべき点を指摘します。



STEP 4 STEP3のアイデアをもとに、1時間で600~1,000字の小論文を書きます。



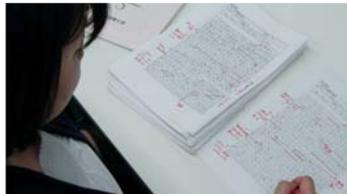
STEP 3 たくさんのアイデアが出ました。この中から書く内容を絞り込みます。



STEP 6 STEP5で指摘された点を改めつつ文章を推敲し、完成度を高めます。



STEP 7 完成した小論文を、最後に教員が添削して返却します。



STEP 8 STEP1~7までを半期で3回繰り返して、論理的な文章を書く力を養成します。



私たちが担当しています

愛知淑徳大学に入学したすべての学生が、大学生としてふさわしい日本語運用力を身につけられるよう、時には厳しく、時には温かく、全力でサポートします。

●全学日本語教育部門教員

【後列左から】外山敦子(准教授/文学部担当)、入口愛(講師/心理・福祉貢献学部担当)、西野由紀(講師/メディアプロデュース学部担当)

【前列左から】畑恵里子(講師/人間情報・健康医療科学部担当)、森本俊之(講師/交流文化・ビジネス学部担当)



学生から、
教職員
から

書く書く、しかじか...

日本語表現T1を受講して

健康医療科学部 1年
正木 健太

「日本語表現T1」の講義を受け、はじめは漢字テストや毎回のように提出する課題に違和感がありました。それは、私の専攻する言語聴覚学の専門科目の一つである言語学の講義で「学問において解答は一つとは限らない」と最初に教わっていたからです。

しかし、講義を受け、自分の文章を客観的にみることができるようになりました。講義は自分の文章を推敲する前に、同テーマで書かれた他の学生の文章を添削するという形式です。それが、後に自分の文章を推敲するときに、より客観的な視点に立てるきっかけとなりました。他の講義のレポート提出時にも、意見に対して一貫性があるかなどに注意を払っています。このような経験から適切な文章を書く能力を高めるため効果的な講義だと実感しました。



正木さん(左)
担当の畑先生(上)・受講生と共に



ビジネス学部 1年
田中 麻美

「日本語表現T1」では、はじめに文章の組み立ての基礎を学び、その上でテーマに沿った小論文作成を実践します。まず、グループでテーマについて意見を出し合い、その意見交換を踏まえて小論文を作成します。その小論文を、学生同士で添削しあい、そして推敲します。これらの過程を経ることで、自分とは異なった意見を知ることができたり、自分の文章の誤りに気づくことができたりしました。

「日本語表現T1」で学んだことはさまざまな場面で役立っています。他の授業でのレポートを作成するときにも、構成をあらかじめ考えたり、分かりやすい表現を心がけたりするようになりました。

文章を書く機会は学年が進むごとに増えると思います。私は今後、「日本語表現T2」を、そして「ビジネスジャパニーズ」を受講し、大学内外で必要な日本語表現の技術を身につけるつもりです。



日本語表現T1授業中

言葉の饞別

メディアプロデュース学部
酒井 晶代 教授

明治期を代表する児童文学作家のひとり、巖谷小波(1870～1933年)がいます。彼が雑誌『少年世界』に発表した短編「言葉の饞別」(1900年10月号)は、郵便局で働く16歳の少年・風間虎一が学問を志し、一念発起して東京へ旅立つまでの立志小説です。ストーリーはこの時代に数多く書かれた立身出世ものの亜流ですが、「言葉の饞別」というタイトルに心ひかれます。貧しい虎一少年には、お金や品物ではなく父親の励ましの言葉が何よりの饞別でした。そしてこの作品自体、ベルリンへの長期滞在を目前にした小波にとって、雑誌の愛読者に贈る饞別でもあったのです。

電子メールも含めると、日々たくさん文章を書きます。なかでも礼状や詫言状のような気持ちを伝える文章を書くことする折に、この「言葉の饞別」という語をふと思い出します。言葉を探しあぐねて「饞別」ならぬ「選別」に苦心するからかも知れません。でもおそらく、それだけの理由ではありません。

どんなモノにもまして、ひとつの言葉が相手を動かしたり、自分を鼓舞したりすることがあります。「言葉の贈り物」を届ける力、受け取る力をうんと身につけたい。手紙や創作のみならず、レポートや論文も、読み手に向けて書かれる贈り物です。「日本語表現」の各科目を通して、そうした贈り物のよき贈り手・受け手が育つことを期待します。



インフォメーション

★日本漢字能力検定(8月20日)、日本語検定(11月13日)学内団体受検を実施しました。

今年で4年目となる日本漢字能力検定の団体受検は、昨年の約2倍の212名が受検。2級合格者は48名(合格率25.7%)でした。
一方、今年度初めて団体受検に参加した日本語検定では、146名が受検。3級認定者(準認定含む)は94名(認定率90.0%)で、全国認定率66.4%を超える結果を残すことができました。

★本部門の取り組みが、以下の新聞・大学広報誌で取り上げられました。

「話題の日本語教育を追う～愛知淑徳大学「日本語表現」」(『朝日新聞』2010年9月25日朝刊)
「研究室探訪38「他者の視点」で読む」(『読売新聞』2010年11月5日朝刊)
「特集:全学必修科目スタート」(『楓信』No.68 2010年5月14日)
「特集:全学必修科目受講レポート」(『楓信』No.69 2010年10月31日)

編集後記

全学日本語教育部門広報誌「@JL」創刊号はいかがでしたか。@JLでは今後も全学日本語教育部門における取り組みなどをお伝えしていきます。広報誌および本部門へのご意見やご要望がございましたら、ぜひお寄せください。次号はさらにパワーアップしてお届けできたらと思っています。(入口 愛)

発行年月日 2011年3月31日
編集/発行 愛知淑徳大学全学日本語教育部門
〒480-1197
愛知県愛知郡長久手町長瀬片平9
TEL:0561-62-4111(代表)